

芥川龍之介「西方の人」論

——〈イエス〉ではなく〈クリスト〉とした意味——

茂 木 美 保

はじめに

芥川が「西方の人」の不完全なことを理由に自殺を延期し、その補完版にあたる「続西方の人」を書き上げた晩（正確には翌日の未明）、『聖書』を枕元に広げたまま自殺を執行したことは周知の事実である。死を目前にした彼の中で、己の生死の決定に〈西方の人〉イエス・キリストが大きな意味を持っていたであろう事は、もはや想像に難くない。しかし、それほどまで〈西方の人〉にこだわりのながら、彼は自殺というイエス・キリストの教えに背くかたちで自身の生にピリオドを打った。これはいかなる意味を持つのか。『聖書』を丹念に引き写しながら、キリスト教の教義と相容れない表現に満ちている「西方の人」に芥川が託したものを読み解き、〈わたし〉にとっての〈わたしのクリスト〉とはいかなるものだったのかを考

えたい。また、人間イエスを描きながら、その人物を〈イエス〉という個人名ではなく、なぜ〈クリスト〉という言葉で表現したのか結論付けたい。なお、本論では〈わたし〉を読み解く手段として、作者である芥川および、芥川の私小説的他作品の主人公の言動を参考とし、それを限りなく〈わたし〉と近いものとして考えることにする。また、論中では『芥川龍之介全集・第十五巻』（岩波書店）収録の「西方の人」を参考とし、旧字体は新字体に改める事とする。

第一章・神性を持たない〈わたしのクリスト〉

第一節・神性を奪われた〈マリア〉と〈聖霊〉

「西方の人」がこれまでに書かれた多くのイエス伝と一線を画している大きな理由に、〈マリア〉と〈聖霊〉からまったく神性を奪っていることが挙げられる。まず第一に、第二節「マリア」における

（マリア）の描かれ方であるが、「マリアは唯の女人だつた。」の一文から始まるこの節は、「炉に燃える火や鳥の野菜や素焼きの瓶や頑丈に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。」として、（マリア）を（炉に燃える火や鳥の野菜や素焼きの瓶や頑丈に出来た腰かけ）と同列のものにする事で（マリア）の中から神性を奪っている。また、第六節「羊飼ひたち」においては「マリアの聖靈に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騒がせるほど、醜聞であつたことは確かである。」とまで書いてある。ここには、聖母信仰として（カトリック教）に見られるような、聖母マリアの姿はもちらんのこと、聖靈によってキリストを孕んだという清らかな処女マリアの姿もない。（唯の女人）か、もしくはそれ以下の女性が「西方の人」における（マリア）なのである。

第二に注目すべきは、第三節「聖靈」において（聖靈）を「必ずしも『聖なるもの』ではない。」とし、「ゲエテはいつも聖靈にDaemonの名を与へてゐた。」と書いている事である。それは、先に挙げた第六節「羊飼ひたち」において（マリアの聖靈に感じて孕んだこと）を（醜聞）と書いている事からも明白である。「西方の人」における（聖靈）は、（マリア）同様その神性を奪われ、（善悪の彼岸）にまで追いやられてるのである。関口安義はこの聖靈観について、次のように論じている。

この聖靈論は、『新約聖書』によつて示される聖靈とは全く内容を異にする。一体に（霊）は超越的存在として不可思議な能力を持つものとされ、その中に神に反する悪魔的な穢れたものがあることは、『新約聖書』にも書かれている。けれども聖靈は、これらの悪靈に対し、神よりまたはキリストより与えられて人を信仰に導き、その奥義を悟らせ、生活を充実させる見えざる力である。

聖靈の働きは、神とキリストの働きと区別することができないので、キリスト教会の中ではそれらは一つに理解され、三位一体論と呼ばれている。龍之介の聖書解釈には、この視点はなく、聖靈を神と切り離し、キリストと切り離し、ただ不可思議なものとして考えられているのである。⁽¹⁾

関口が指摘する通り、「西方の人」における（聖靈）は、『聖書』における単なる（霊）（もしくは（悪霊））と同じであるかのような扱いである。『聖書』には、（霊）と（聖霊）は別物である事がはっきりと書かれているにも拘わらずである。このことは、（聖霊）を（神）と（キリスト）との三位一体の存在として捉えるキリスト教とは大きく一線を画すものである事に注意を払わねばなるまい。

第二節・神性を奪われた（クリスト）

この三位一体説の崩壊は「西方の人」における（聖霊）親が、従来のクリスト教親から逸脱しているという事だけではなく、（聖霊）に感じて孕んだ（マリア）についても逸脱しているのだということに気づくべきである。（聖霊）から神性を奪ったならば、（聖霊）に感じて孕んだ（マリア）の子である（クリスト）に神性が宿る事はけつしてあり得ないからである。

それを裏付けるものとして「西方の人」には、第七節「博士たち」、第八節「ヘロデ」、第九節「ボヘミア精神」などに、（クリスト）の実に平凡なさまが書かれている。第七節「博士たち」においては、（クリスト）は多くの博士たちの中でも（僅かに二人か三人）だけにしか見いだされなかっただけでなく、その存在自体を（「またか！」）という感嘆符と共にたびたび出現するものとして書いている。また、第八節「ヘロデ」においても「彼はクリストを恐れるためにベツレヘムの幼な子を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼らの中にはまじつてゐたであらう。」と（クリスト）を唯一の存在としてでなく、複数のありふれた存在として書いている。第九節の「ボヘミア精神」においてはそれが具体的にとなり、「佐世保や横須賀に転任する海軍将校の家庭にも見いだすであらう。」とまで書いている。いうまでもなく、この（クリスト）像は従来のキ

リスト教とは大きく異なつて、実に平凡極まりないものである。また、第二八節「イエルサレム」には、（クリスト）が無花果を呪つて枯らし、イエルサレム神殿においては両替人や商人達の腰掛けを打ち壊すという『新約聖書』から内容を抽出した表現があるが、あくまでもその解釈は人間的な（クリスト）というものであり、キリスト教的なものではないのである。

しかし、このような神性を失つた（クリスト）親は、キリスト教を信じていない人間にとつては自然なクリスト親とも言える。『聖書』における表現が一種の比喩であると了解する事は出来たとしても、（クリスト）に度々見ることの出来るヒステリックとも言うべき姿は、人間的に過ぎると感じられ、（クリスト）を俗化して見る事は当然の帰結とも言えるからだ。言うなれば、「西方の人」に見られる（マリア）や（聖霊）や（クリスト）の、神性を奪われたさまは、信仰を持たない者が捉えた（わたしたちのクリスト）親と、さして違いはないと考えられる。

第三節・神性を持たない（わたしのクリスト）

このように「西方の人」という作品は、『聖書』から丹念に引き写された要素で構成されながら、その解釈は従来のクリスト教親からは大きくかけ離れて、私的な解釈に満ちている。しかし、「西方

の「人」には、信仰を持たない者が捉えた（わたしたちのクリスト）伝と言うには不自然な記述が見える。それは、第一節「この人を見よ」における、（わたし）はまず「クリスト教を——殊にカトリック教を愛し」、次に「クリスト教のために殉じたクリスト教徒たちにある興味を感じ」、「やつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した」という一連の表現である。ここには二つの（カトリック教）に反する姿勢がある。それは、本来ならば『聖書』と記すべき書物をわざわざ（伝記）と記している事と、神の子（クリスト）に対して（と云ふ人）という形容を付けているという点である。この二つが意図的にされた表現である事は間違いない。（四人の伝記作者）と表現されたマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの書いた書物は、信仰の対象となるべき『新約聖書』の重要な構成書であることは周知の事実であつて、それをあえて（クリストの伝記）と表現することはない。また、神と聖霊との三位一体で語られるべきクリストに、（人）という認識を加えるものは、少なくとも（カトリック教）を信じるものの中にはないはずであるからだ。しかし、それを承知の上で、（殊にカトリック教を愛してゐた）と（わたし）は書いている。明らかに（カトリック教）から逸脱した表現を使っているにも拘わらずである。

自然とも言える表現を使用したのだろうか。それを解く鍵は第一節の末尾にあたる「わたしは唯、わたしの感じた通りに『わたしのクリスト』を記すのである。」という一文にあると考えられる。つまり、（わたし）の書こうとしている（クリスト）は、（歴史的事実や地理的事実を顧みない）というばかりでなく、従来のクリスト教、殊に愛していたはずの（カトリック教）も顧みない（わたしのクリスト）だという事である。本文においても（わたし）のクリスト」という語には「」が付けられている。それは特別な表現であり、他とは違った意味を持つ言葉だという心理の表れに他ならない。こうして考えると（わたし）は、客観的な（クリスト）ではなく、主観的な（クリスト）を描こうとしている事が明らかである。そういった意味で「西方の人」は、はじめから万人に共通理解されるキリスト教的（わたしたちのクリスト）でも、信仰を持たない（わたしたちのクリスト）でもなく、個人的な（わたしのクリスト）を描いた作品という事ができるのである。

第二章・（クリスト）に内包された（わたし）

第一節・（クリスト）に見る共通点

では、芥川が死の決意を曲げてまで書き綴つた（わたし）のクリストとは具体的にどんな（クリスト）だったのだろうか。（わたし

のクリスト」が、信仰を持たない者達にとっての「わたしたちのクリスト」と同じ、平凡なだけの存在であつたなら、わざわざ「わたしのクリスト」を書き残す必要はなかつたはずである。「わたし」にとつて特別な存在であつたからこそ、「わたしのクリスト」が書かれたのである。「わたし」にとつて「クリスト」が特別となつた要因の一つは、「わたし」が「クリスト」と共通点を見いだしているということにあると考えられる。例えば、「わたし」は「クリスト」を「ジャアナリスト」だと捉え、芥川自身は「文芸的な、余りに文芸的な」において「少なくとも僕はジャアナリストだつた。今日も又ジャアナリストである。将来も勿論ジャアナリストであらう。」と書いている。「クリスト」を「ジャアナリスト」と捉えているからには自身との共通点を発見する事はたやすい事である。芥川は同じく「文芸的な、余りに文芸的な」の第二〇節「ジャアナリスト」において「いくら書いて行つても、しゃべりたい事は尽きそうもない。僕は実にこう云ふ点ではジャアナリストであると思つている。」と述べている。ここから分かるのは、「僕」は「自分がしゃべりたいと思つている事を伝えるもの」を「ジャアナリスト」と捉えているらしいという事である。そういった意味では「クリスト」はまさに「ジャアナリスト」であるといえ、世の権力に怯むことなく自分のしゃべりたい事をしゃべつた彼ほど「ジャアナリスト」の名

にふさわしい者はないといえる。

また、「わたし」は「クリスト」を「詩人」と捉えており、芥川自身も「詩人」であることを強く願つていたようである。このことについて興味深い事実を萩原朔太郎が「芥川龍之介の死」²⁾の中で語っている。朔太郎は芥川を「彼は詩に熱情してゐる小説家である。」と評し、芥川を「詩人」ではないと公言していたのだが、それに對し芥川が、抗議のために怒鳴り込んできた事が書かれている。このような事からも「わたし」には、自身が「詩人」であることを強く願つていた事が伺えるのである。對して、「クリスト」は『聖書』における彼の言葉に比喩の多い事や、「西方の人」第三節「詩人」にも挙げられている通り、「一本の百合を」「ソロモンの栄華の極みの時」よりも更に美しい」と言つた事などからも「詩人」といつてさしつかえない側面を持つていた事は明らかである。

また、周知の通り、芥川の実母（ふく）は狂人である。これは、「わたし」にとつてスキャンダルであつたといえる。それに対し「クリスト」の母（マリア）は婚前妊娠という、同じくスキャンダルを負つている。こういった点においても、「わたし」は「クリスト」に共通点を見いだしていたと考えて差し支えあるまい。（ただ、ここで注意したいのは「マリア」の中に「ふく」を見いだしたのではないことである。あくまでも「わたし」にとつての「ふく」と、

（クリスト）にとつての（マリア）の間に共通点を見いだしただけということである。）

第二節・（クリスト）に見る理想

（わたしのクリスト）が（ジャアナリスト）であり（詩人）であつたことに対して、「西方の人」には強いこだわりが見える。第一に（ジャアナリスト）もしくは（ジャアナリズム）という言葉だが、この言葉は（クリスト）に対して何度となく使われ、かつ最大級の形容詞を付けて表現される事が多い。例えば、第一四節「聖霊の子供」には、（ジャアナリスト）について「彼の天才」とあり、また「天才的ジャアナリズム」とある。これは、自分を含めた（ジャアナリスト）の頂点と云つて差し支えないところに（クリスト）をおいている事を示しているだろう。確かにこのことは先に挙げた「文芸的な、余りに文芸的な」における（ジャアナリスト）の定義から行くと、（クリスト）は実に二千年間「自分がしゃべりたいと思つている事を伝え」続けているといえ、その意味で（クリスト）はまさしく（天才）の名にふさわしいと言えるだろう。

第二に（詩人）もしくは（詩的）という言葉についてであるが、これも頻繁に（クリスト）に用いられている。第一四節には「彼は詩の中にどれくらい情熱を感じていただろう。」という一文があり、

第一八節「クリスト教」には（クリスト教）を「逆説の多い詩的宗教」としたうえで、「彼の天才」という言葉を再び使っている。彼のしゃべった言葉を（詩）と捉えるなら、やはり二千年の時を経てなお読者を得、人々の心を動かしている（クリスト）の（詩）はこれ以上ないくらい優れていると言えるであらうといえ、（クリスト）は（詩人）としても（天才）だといえるであらう。このように、（ジャアナリスト）であり（詩人）であつた（わたし）にとつて、同じ（ジャアナリスト）であり（詩人）であつた（クリスト）の有り様は、実に理想的であり、憧れの対象であつたと考えられる。

また、（クリスト）自身だけではなく（クリスト）を取り巻く環境の中にも（わたし）にとつての理想があつたと考えられる。「西方の人」第一七節「背徳者」の中で、（わたし）は（クリスト）と（マリア）の關係について「クリストの母、美しいマリアはクリストには必ずしも母ではなかつた。彼の愛したものは彼の道に従ふものだつた。」と書いている。これは「聖書」のマタイ伝の内容を抽出する形で書かれているのだが、表面的には『聖書』にそつたこの部分も（わたし）にとつては（クリスト）に、もう一つの共通点を見いだす事に通じたと考えられる。それは、（わたし）が懂れてやまなかつた（芸術至上主義）という言葉である。（芸術至上主義）について、芥川はたびたび書いているが、（家族）については特に、解

放されたいと何度となく公言している。先にも挙げた朔太郎の「芥川龍之介の死」の中には、「妻子や家庭やの一切を捨て、自由漂流者の群に入りたい」と沈痛な語気で語っていた事が書かれている。こういった事からも、「わたし」にとつて「家族」といった煩わしいものから解放され、芸術だけに生きる事は大きな望みであったことがわかる。それをふまえ（クリスト）を考えてみると、（クリスト）は「家族」というしがらみから解放されたところで自身の活動をしている事が分かる。つまり、芸術家としても（クリスト）は「わたし」にとつての理想であったのだ。また、第三一節「クリストよりもバラバを」には、このように書かれている。

クリストは彼自身に、——彼自身の中のマリアに反逆してゐる。それはバラバの反逆よりも更に根本的な反逆だった。同時に又「人間的な、余りに人間的な」反逆だった。

ここに書かれる（クリスト）は、「マリア」に対して「反逆」という過激な対立を見せている。この部分の（マリア）を「炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や頑丈に出来た腰かけ」といった日常的、家庭的な存在の象徴とするなら、この表現もまた、（クリスト）の「芸術至上主義」を表す表現と言えるだろう。しかし注目すべきは、彼自身の中のマリアに「反逆」しているという事は、彼はもともと（マリア）的要素を含んで存在しているということである。第三

六節「クリストの一生」の中にも「彼は母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けていた。」という一文があるが、重要なのは、（クリスト）がただ単に（父の聖霊の支配を受け）た存在なのではなく、（母マリア）の支配も受けていたという事実である。その点において（クリスト）は、「妻子や家庭やの一切を捨て、自由漂流者の群に入りたい」と願いながら、妻子や家庭を捨てられなかった「わたし」にとつて単なる遠い理想像ではなく、同じしがらみの中から出発したという共通部分を持った理想像となるのである。

第三節・（クリスト）に内包された「わたし」

このように、「西方の人」における「わたしのクリスト」とは、自分と（クリスト）の共通点を見いだした結果生まれた、「わたし」にしか見いだすことの出来ない「わたしだけのクリスト」であったことがわかる。しかし、あくまでも（クリスト）の中に「わたし」を見いだした結果が「西方の人」なのであって、（クリスト）に自己投影した結果ではないことを改めて考えたい。芥川が死の間際までこれほどまでに（クリスト）にこだわったのは、自身とは違い最後まで「聖霊の子」であり、「地上から天上へ登る」事を続けた部分に憧れたからである。（註：作中ではこの表現は、「天上から地上へ」と表記されており、誤記か否かで説が分かれており注意が必要。筆者は誤記

説を探っている。「我々のゲエテを愛するのはマリアの子だったためではない。」「我々のゲエテを愛するのは唯聖霊の子だったためである。」とゲエテを語る時、その言葉は〈クリスト〉にも跳ね返ってくる。我々のクリストを愛するのはマリアの子だったためではない。我々のクリストを愛するのは唯聖霊の子だったためである、と。(わたし)は〈マリア〉的存在から逃れられなかった自身と比べ、(聖霊の子)であった〈クリスト〉を愛しているのである。「それは天上から地上に登るために無惨にも折れた梯子である。」と表記される梯子は〈薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いて〉いるという。この文中の〈それ〉とは〈クリスト〉の人生を指し示していると考えられることから、(わたし)の〈クリスト〉の人生に対する認識は、無惨で薄暗いものだと考えられ、そこに芥川自身の人生を重ね合わせて〈クリスト〉(わたし)の式を作ったという論は多いが、果たしてそうだろうか。(人の子)〈クリスト〉は、確かに〈無惨にも〉十字架の上の死という人生の中断を余儀なくされたが、その死の向こうにあったものには決して〈無惨にも折れ〉て〈薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾い〉た〈梯子〉のようなものではなかったことは、第三六節「クリストの一生」において〈クリストの一生はいつも我々を動かすであろう〉と書いた(わたし)には、良くわかっていただろう。(わたし)こそまさに

〈クリスト〉に動かされた人間だからである。「統西方の人」には「クリストは「万人の鏡」である。「万人の鏡」と云ふ意味は万人のクリストに做へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に万人の彼ら自身を発見するからである。」とある。それはつまり、(わたし)の投影が〈クリスト〉なのではなく、〈クリスト〉の中に内包された(わたし)を見つけるといふ思考の表れに他ならないだろう。

第三章・〈イエス〉ではなく〈クリスト〉とした意味

第一節・他の〈クリストたち〉より優れた〈イエス〉
「西方の人」という作品はキリスト教的な〈神の子クリスト〉ではなく、〈人間イエス〉を描いた作品であるにもかかわらず、個人名の〈イエス〉ではなく〈クリスト〉という表記を用いたのか、過去何度となく疑問視されてきた。作中でも何度となく〈クリストたち〉として挙げたゲーテやストリンントベリイのように、同じ〈クリスト〉でありながら〈イエス〉に対してだけ個人名を用いなかったのは何故か。その答えは、(わたし)にとつての〈イエス〉が、〈クリストたち〉の中でも一番優れた〈クリスト〉であったからに他ならない。数多く存在する〈クリストたち〉の中でも、(わたしのクリスト)は〈イエス〉だったからである。(わたしのクリスト)とは、(わたし)が解釈した〈クリスト〉像という他に、そういう意

味も含んでいるのである。(クリスト)とは本来、油を注がれし者、神より選ばれし者という意味の言葉である。そういつた意味でも(わたし)にとつての(イエス・クリスト)は選ばれし者の中でもひときわ輝く存在であつたのだろう。ここで「或阿呆の一生」の第一節「時代」を引用したい。

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新しい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、
.....

そのうちに日の暮れは迫り出した。しかし彼は熱心に本の背表紙を読み続けた。そこに並んでゐるのは本といふより、寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、
.....
彼は薄暗がりと戦ひながら彼らの名前を数えていつた。が、本はおのづからもの憂いの影の中に沈みはじめた。彼はとうとうこん気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電球が一つ、丁度彼の額の上に突然ぽかりと灯をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に働いている客を見下ろした。彼らは妙に小さかつた。のみならずいかにも見すばらし

かつた。

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼らを見渡ししてゐた。

多くの研究者が指摘しているが、この(梯子)は、「西方の人」における(梯子)とよく似た働きをしている。(梯子)の上には、多くの(聖霊の子)たちが鎮座し、(彼)はそれに(梯子)に(登る)ことで近づく事を試みている。しかし、(彼)の場合は(クリスト)とは違い、途中で(梯子)降りようとする。下を(見下ろし)て(みすばらしい)と思ひ、「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」とまで思ひながら(彼)は(梯子)を降りる事を暗示されているのである。

ここに、芥川と(クリスト)の相違がある。(クリスト)は最後まで(梯子)を(登り)続けて死んだ人間である。それは「クリストの一生ははじめだつた。が、彼の後に生まれた聖霊の子たちの一生を象徴してゐた。」(36 クリストの一生)ということからもわかるとおり(聖霊の子)に定められた宿命であつた。だが、芥川は(日の暮れ)という(天上)の力によって(梯子)から降りざる終えなかつた人間である。(額の上に突然ぽかり)とともつた明かりも、結局は(天上)ではなく(地上)に目を向けさせる結果となつた。また、(彼)はその他の(クリストたち)の(背表紙)を見る

事ができるくらいの高見に〈登る〉ことが出来ていたともとれる。そう考えれば、芥川が他のどの〈クリストたち〉でもなく、あえて〈イエス・クリスト〉を〈わたしのクリスト〉に選んだのは、その〈背〉中さえもかいま見る事のできない、さらに高い所にまで〈登った〉〈クリスト〉が〈イエス〉であつたからと言えるであろう。

第二節・〈イエス〉ではなく〈クリスト〉とした意味

芥川が、自身にとつて〈背〉を見ることもかなわぬ〈理想〉の体现者ともいうべき〈イエス〉に自分との共通点を見いだした時の喜びはいかなるものだったのだろうか。クリストとは本来、救い主、選ばれし者という意味の言葉であるが、〈わたし〉にとつての〈イエス・クリスト〉は選ばれし者の中でもひときわ輝く存在であつたのだらう。〈わたし〉が〈イエス〉をあえて〈クリスト〉と呼ぶ時、そこには救い主としての意味も存在していたのではないか。芥川が『女性改造』⁽³⁾の対談で、信仰と理想という事について興味深い事を語っている。

帆足 従来の信仰は確定の信仰であつたが、不安の状態にある現代人の信仰は動的信仰でせう。

佐藤 信仰などは考えないと思うね。

芥川 然し信仰と云ふ言葉の代りに理想といふ言葉をおきか

へては？

ここから窺えるのは、芥川にとつての信仰とは、理想という言葉に置き換える事が可能であると言う事である。つまり〈わたし〉が〈クリスト〉に自身に理想を見いだしていた事は踏まえて考えれば、〈クリスト〉に対して彼が抱いてきた理想と言うものは、信仰という名に置き換えられるという事である。このことから、〈わたし〉が「西方の人」において〈イエス〉を〈クリスト〉とした意味は、〈わたし〉にとつては〈イエス〉こそ他とは一線を画した唯一最高の理想存在であり、信仰の対象となるべき救い主であつたらだと考えられる。〈わたしのクリスト〉は〈歴史的事実や地理的事実を顧みない〉〈クリスト〉であつたため、信仰を持たない〈わたし〉たちのクリストや、多くの人間〈イエス〉観と混同される結果となつたが、〈イエス〉こそ〈わたしのクリスト〉であり、〈わたしの救い主〉であつたのである。

おわりに

芥川がクリストの中に自分との共通点を見出したことは、彼にとつてこの上なく幸せな発見であつただらう。芥川にとつて、〈イエス〉の〈人間的な余りに人間的な〉姿は、僅かにも〈イエス〉を貶めるのではなく、むしろ、その人間的な〈イエス〉が理想を負

うことで、芥川自身の人間的な部分を包み込み、許容し（天上）へと導いてくれるような錯覚さえ呼び起こしたのではと推測する。そう考えれば、（わたし）にとっては（イエス）こそが、他の何者でもなく真の（クリスト）であったと言えるだろう。（わたし）は（奇跡）を信じていた。「女性改造」の対談で「わたしは奇跡を信じます。」と言いきった芥川が、「西方の人」第十六節「奇跡」において、「クリストは時々奇跡を行った。が、それは彼自身にとって一つの比喩を作るよりも容易だった。」と、奇跡に対して無条件な受け入れを見せる時、（わたし）がいかに（クリスト）を愛し信じていたかを思うと、聖書を読みながら永遠の眠りについた彼の最後は、キリスト包まれた安らかなものであったのかも知れないと思えてならない。

註(1) 「西方の人——芥川龍之介の道程(十三)——」(『都留文科大・

研究紀要』四一号 一九九四年一〇月発行)

(2) 萩原朔太郎「芥川龍之介の死」(『改造』一九二七年九月発行)

(3) 「女性改造談話会(一) 現代婦人と信仰に就いて」(『女性改造』

一九二三年八月一日発行)

参考文献

吉田精一「芥川龍之介」三省堂 一九五二年二月発行

佐藤泰正「芥川龍之介管見——近代日本文学とキリスト教に関する一試

論」(『国文学会』一九六一年九月発行)

佐藤康正「西方の人」論」(『文学とその内なる神』桜楓社 一九七四年三月発行)

関口安義「芥川龍之介のイエス論——西方の人」(『統西方の人』——)

「芥川龍之介 実像と虚像」一九八八年二月 洋々社

笹淵友一「西方の人」論」(『明治大正文学の分析』明治書院 一九七〇年十一月発行)

〇年十一月発行)

佐藤善也「統西方の人」における「天上」と「地上」の問題」(『立教大

学日本文学』一九八九年七月発行)

(二〇〇三年卒業 本学大学院博士前期課程一年)